



## 目次

「明治期の日本」コレクション (加藤詔士) .....	1
「ご来室」をお待ちしております 国際開発研究科情報資料室の紹介 (荒木千夏江) .....	4
平成10年度中央図書館利用状況 .....	6
平成10年度附属図書館蔵書冊数 及び年間図書・雑誌受入数 .....	7

## 「明治期の日本」コレクション

## 加藤 詔士(証治)

## (1)

「幕末以来日本について外国人によって書かれた本は、五万冊以上に達すると言われているが、日本の図書館でその十分の一も集めているところはないだろう。」

板坂元の『ちょっと小粋な話』(1992)という随筆集には、こんな記述がある。バブル経済の時代なら、「おそらく相当量の稀覯本を集めることができたはずだ」ったのに、そういうこともできないで、「異文化摩擦を問題にしたり、日本の国際化を強調したりするのは、仏造って魂入れず的になりかねない」という趣旨からの発言である。

名古屋大学のばあい、そうした外国人によって書かれた日本関係図書はどれくらい入っているのだろうか。これこそ天下の孤本という一本に、お目にかかれまいだろうか。そう思って、かつて調べてみたことがある。内外教育文化交流史を専攻研究している筆者には、どうにも気になるところである。

実は、本学の附属図書館には、この種の明治期日本関係外国書がまとまって入っている。もっとも、まとまっているといってもそれほど大型でない。コレクションと呼ぶにはいささか気はざかしいほどに薄手であるが、「明治期の日

本」コレクションと名づけられている。「図書管理通知書」をみると、210点から成るコレクションであって、予算額は408万円。バブル期の1987(昭和62)年度の補正予算で経費がついたおりに、購入されたものであるという。

## (2)

一口に「明治期の日本」コレクションといっても、その内容は実に多彩である。種々様々の書冊がひとまとめにされた感がないでもない。薄手の、安っぽい本も含まれている。

なんとといっても豊富なのは英語本であるが、フランス語、ドイツ語、さらにはポルトガル語の本も含まれている。手にとって、慈しみながら眺めてみると、いろいろなことが判明する。

第一に、菊花紋が背や平(ひら)に印刻された図書が、何冊か含まれていることは、とりわけ興味深い。十六葉八重表菊形という天皇家の御紋章がついた本としては、筆者の確認したかぎりでは、下記の8点が含まれている。

M. Menpes, *Japan*, London, 1901.

L. Hearn, *Japan, an Attempt at Interpretation*, New York, 1904.

F. Palmer, *With Kuroki in Manchuria*, New York, 1904.

H. Dyer, *Dai Nippon, the Britain of the East*,

London, 1905.

The Military Correspondent of the Times, *The War in the Far East, 1904-1905*, London, 1905.

C. R. Grant, trans., *Before Port Arthur in a Destroyer, the Personal Diary of a Japanese Naval Officer*, London, 1907.

J. H. Longford, *Japan of the Japanese*, New York, 1912.

E. H. Pickering, *Japan's Place in the Modern World*, London, 1936.

十六葉八重表菊形ではなく、単なる菊花紋となると、ほかに何点も認められる。二十四の乱菊の一種である紋章が付されている図書 ( J. A. B. Scherer, *Japan To-day*. Philadelphia and London, 1904 )、平には二十一葉の、背には十二葉の菊紋がそれぞれ付されている図書 ( F. Little, *The Lady of the Decoration*. New York, 1908 )、平には二十一葉の菊紋が、背には十四葉の菊に似せた紋が配されている図書 ( G. W. Knox, *Imperial Japan, the Country & Its People*. London, 1906 ) などといったぐあいである。

第二に、古書であるだけに、素姓はとうぜんまちまちである。素姓の分からない本がおおいけれども、確かにそれと分かるものが何点がある。学校、公共図書館、私立の図書館やブック・クラブ、アシニアム ( 文庫 )、あるいはアメリカ国防省などから廃棄された本、献呈ないし寄贈された署名入り本、褒賞として授与された本。さらには、英国の W. H. スミス社の貸本や、タイムズ・ブック・クラブの貸本なども含まれているから興味深い。そうした素姓が分かるのも、蔵書印、自筆の署名、社票、ボイド ( 打ち抜き文字 )、シールプレス ( 浮き出しプレス ) などが、それぞれの図書の見返し、遊び紙、標題紙 ( 扉 )、略標題紙などに認められるからである。

そのうち、貸本屋、ブック・クラブ、文庫、図書館といった、読書環境ないし学習拠点にかかわりのある図書が、筆者にはとくに興味深い。先ごろ「英国成人学習の社会史」と題する講義を開いたとき、活用してみたことがある。

とりわけ、W. H. スミス社にかかわる図書が貴重である。スミス社といえば、19世紀の中ご

ろから今世紀中ごろまで繁盛した、英国の代表的な貸本屋であって、近代英国の読者層形成史のなかで大きな位置をしめている。鉄道が発達し、鉄道旅行というあたらしいレジャー形態が普及するなか、全国各地の鉄道駅にブックストールを開店して、本を販売しただけでなく、旅行中の本の貸出業務もはじめたのだった。しかも、イエローバックといって、汽車のなかにまで持ちこみやすい小型で、手軽な内容の、読み切りタイプの本も創刊している。好みの本を借りて汽車に乗りこみ、下車駅にある店で返却することもできるというのだから、なかなかのアイデアである。おかげで、旅行中の読書習慣を定着させることになり、読者層の拡大に貢献したのだった。

そんなスミス社の社票が付いたり ( J. Buchan ed., *Japan, the Nations of To-day*. London, 1904 )、貸本料金表が貼られた本 ( T. W. H. Crosland, *The Truth about Japan*. London, 1904 など ) が含まれているのである。そうした旅行むきの貸本ではなくて、店頭に並べられた大冊の本ももちろん含まれている。( なお、W. H. スミス社は、貸本部は1961年に廃業したが、大手の出版社として今も存続している。タイムズ・ブック・クラブの方も、1962年に貸本部をハロウズに譲渡している。 )

第三に、このコレクションの内訳は、日本の文化論、社会論のほかに、歴史、紀行、風俗、旅行案内、辞典、小説の類いなど種々雑多である。そのなかには、なじみのある図書がいくつみられる。

イザベラ・バード ( 高梨健吉訳 ) 『日本奥地紀行』 ( 平凡社、1973 ) の原著 ( I. L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan* ) については、初版、新版、それにポピュラー版が含まれている。日本アルプスの踏査で知られる W. ウェストンの著書も二冊ある ( W. Weston, *Japan*, 1926; *A Wayfarer in Unfamiliar Japan*. 1925 )。日本文化研究者 P. ローエル ( 川西瑛子訳 ) 『極東の魂』 ( 公論社、1977 ) の原著 ( P. Lowell, *The Soul of the Far East* ) は、1888年版と1911年版の二種類ふくまれている。

ラフカディオ・ハーンの著作になると、これ

はずいぶんある。前出の『神国日本』(*Japan, an Attempt at Interpretation*)のほかに、『東の国から』(*Out of the East*. 1895)、『心』(*Kokoro*. 1896)、『怪談』(*Kwaidan*. 1904)、『日本雑録』(*A Japanese Miscellany*. 1905)、『天の川奇譚その他』(*The Romance of the Milky Way and Other Studies and Stories*. 1905)、『人生と文学』(*Life and Literature*. 1917)、『詩の鑑賞』(*Appreciation of Poetry*. 1922)などである。

東京帝国大学などで英文学を教えたJ. I. ブライアンの『内からみた日本』(*J. I. Bryan, Japan from Within, An Inquiry into the Political, Industrial, Commercial, Financial, Agricultural, Armament and Educational Conditions of Modern Japan*. 1924)ならびに『日本のすべて』(*Japanese All*. 1928)も含まれている。

そのほか、駐日英国公使館書記W. G. アストンの『日本文学史』(*W. G. Aston, A History of Japanese Literature*. 1907)とそのフランス語訳本(*Litterature Japonaise*. 1921)、駐日英国領事でロンドン大学キングス・カレッジの日本語教授であった、前出のJ. H. ロングフォード著『新日本の発達』(*The Evolution of New Japan*. 1913)、アメリカン・ボードから派遣された宣教師で、同志社大学や京都帝国大学の教壇に立ったS. L. ギューリックの『日本の働く女性』(*S. L. Gulick, Working Women of Japan*. 1915)、牧野義雄の『述懐日誌』(*Y. Markino, My Recollections and Reflections*. 1913)のように、カラーあるいはモノクロの挿絵がふんだんに添付されている書冊もみられる。

第四に、外国人むけの旅行ガイドブックが、数冊含まれている。東京商業会議所、鉄道省、日本国有鉄道、民間のホテルが編集・刊行したもので、いずれも美しい小型のペーパーバックである。The Welcome Society (Kihin Kai), *A Guide-book for Tourists in Japan*. 1908. B. Thomson, *A Guide to the Districts of Kyoto, Nara and Yamada*. 1911. *Japan Travellers' Handy Guide*. 1922. *Le Japon Mystique*. 1927. *Pocket Guide to Japan*. 1929がそれである。絵入り図入りのものがおおくて、ながめるだけでもとても楽しい。

第五には、外国書といっても、外国人の著作ばかりではなく、日本人の手になる著書も何冊が含まれている。たとえば、岡倉覚三『東洋の理想』(*The Ideals of the East*. 1905)、斎藤斐章『日本史』(*Geschichte Japans*. 1912)、徳富猪一郎『日米関係』(*Japanese-American Relations*. 1922)、末松謙澄の『旭日』(*The Risen Sun*, 1905)、朝河貫一『日露の衝突』(*The Russo-Japanese Conflict, its Causes and Issues*. 1904)、桜井忠温『肉弾』(*Human Bullets, a Soldier's Story of Port Arthur*, 1917)などである。

( 3 )

「明治期の日本」コレクションは、以上のような多彩な内容と興味ある特色をもっている。けれども、稀本はどうかというと、どうみてもおおいとはいえない。当館以外にその所在を聞かないというような稀覯本でもあれば、特筆大書できるのだが、残念ながら見あたらないようである。古書市場で高値を呼びそうな一本を見いだすことはむづかしい。『和訳英辞林』として知られる*An English Japanese Pronouncing Dictionary*といえ、価値高き書冊であるが、それとて初版本ではなく第4版(1871)である。C. F. プリンクリー・南條文雄・岩崎行親共編『和英大辞典』(*An Unbridged Japanese-English Dictionary*) (三省堂)のばあいも、残念ながら第12版(明40)である。

書き入れ本、線引き本でもあればと願ってページを繰ってみるのだが、どうもこれといった一本はない。めずらしい蔵書印にも、まだ行きあわない。

もっとも、この手の通覧は、毎回、大小の発見があるものである。こまかく調査すれば、さらにおおくの新知見がえられることであろう。とくに書冊の本文をたんねんにみていけば、さらに二・三点の収穫があるかもしれない。

以上の「明治期の日本」コレクションの図書番号は210.6。本館4階に配架されており、自由に手にとって活用することができる。

最後に一言。本コレクションのような、日本について外国人によって書かれた本ないし文献に関する情報は、日本であれ外国においてであ

れ、これまでにどれほど収集・整理されているのだろうか。日本関係翻訳図書については『世界のみた日本』(国立国会図書館、1989)とか『事典 外国人の見た日本』(日外アソシエーツ、1992)とかがあっても、翻訳のないものも含めた、もっと総合的な「外国人による日本研究」とでも題した調査研究が進展することを期

待したいと思う。

小文ながら、本稿が成るには、八田和子さん(当時・情報サービス課閲覧掛長)ほか、何人もの館員のかたがたのお世話になった。記して多謝する。

(かとう しょうじ 教育学部教官)

## 「ご来室」をお待ちしております

### - 国際開発研究科情報資料室の紹介 -

荒木 千夏江

#### < 概要 >

国際開発研究科は、平成3(1991)年4月に設立された国際開発、国際協力、国際コミュニケーションの3専攻からなる日本で最初の国際開発系の「独立研究科」であり、名古屋大学で9番目の大学院である。平成3(1991)年から平成6(1994)年までの4年間、経済学部図書室に併設されていた「国際開発研究科図書室」は、平成7(1995)年3月に竣工された国際開発研究科棟の4階に同年4月「国際開発研究科情報資料室」として新たに設置された。

#### < 特徴ある資料群 >

「国際開発」という比較的新しい学問分野は政治・経済・教育・文化などの多岐にわたる学際的分野を網羅し、学生にはすでに社会に出て現場で活躍している実務経験者も多い。カリキュラムも多様で国内・海外の実地研修も含まれている。そのため研究機関は言うに及ばず、国際機関や各国の政府関係機関、またNGOやNPOなど民間の各種団体の情報や資料を収集し、新しい部局図書室としてユニークなコレクションを持つことを心がけてきた。一例として発行機関別の全点購入図書があり、平成11(1999)年7月現在では、日本貿易振興会アジア経済研究所(Japan External Trade Organization-Institutional Developing Economies)、東南アジア研究所(Institute of Southeast Asian Studies)、世界銀行(World Bank)、国際連合大

学(United Nations University)がその対象となっている。また寄贈依頼による資料収集も積極的にを行い、アジア生産性機構(Asian Productivity Organization)国際協力事業団(Japan International Cooperation Agency)については、年間で相当数の出版物の寄贈があるため「別置資料」としている。その他関係機関からの寄贈も多く、継続して積極的な資料収集につとめている。毎年実施される海外実地研修の事前研修資料として受け入れのはじまった外国新聞も、現在はインドネシア・ヴェトナム・タイといったアジア諸国の主要紙を中心に7紙となった。当初は数週間もの到着遅延や欠号すらあったが、海外文献の流通も安定してきた現在では、数日遅れで毎日確実に届くようになった。インターネットや衛星放送が普及しても、新聞は現在の各国事情を知るための重要な情報源である。保存スペースの問題もあり残念ながら保存は1年間と限られているが、その国の動向を知る貴重な資料として有効利用されている。情報資料室では現在2万冊近い蔵書があり、300タイトルを越す雑誌(和雑誌120タイトル、洋雑誌218タイトル)を受け入れている。いまだ研究に十分な蔵書数とは言い難く、教官や学生にとっては現在も関連部局図書室の利用が欠かせないのが実状であるが、昨年度は『アジア経済』(日本貿易振興会アジア経済研究所)が通巻400号を記念して特集した「日本における発展途上地域研究1986-

94・地域編」(第36巻第6/7号、1995.6/7)「同・テーマ編」(第36巻第8号、1995.8)の文献リストより基本図書約800タイトルを選定、現在約600冊を受け入れ、研究用図書に比べ遅れがちであった基本図書も整備された。これらの重点的な蔵書整備により、学内の利用者はもちろん学外からの資料利用申し込みも年々増加している。

#### <和洋混排>

「和洋混排(和図書と洋図書を同じ書架に並べる)」という排架方法は当室の特徴のひとつである。当初は和洋別にするスペースがなく暫定的に採用した排架方式であったが、利用者にもサービスする側にも不都合はなく、むしろ和洋を問わず書架上で類書を探すこともでき好都合である。当研究科は平成11(1999)年7月現在、全学生数315名のうち留学生が134名と半数近くを占め、蔵書構成も和図書と洋図書の構成比がおよそ2:3、雑誌タイトルでは洋雑誌が和雑誌の倍近い。そういったことから和洋混排という排架は正解だと思えるのだが、当初から賛否両論あり、いまだに戸惑う利用者もないわけではない。

#### <名実ともに情報資料室であるために>

研究科棟設立とほぼ同時に部局内LANの整備が行われ、情報資料室も当初から情報流通の整備・運営に積極的に参加してきた。蔵書を中心とする様々な「情報」の活用を念頭におき、情報資料室の在り方を模索してきたのである。現在、図書館(室)が所蔵、提供しているのは紙媒体の蔵書に限ったものでない。CD-ROMやオンラインデータベースをはじめとする多種多様な媒体で提供される「情報」をいかに有効に流通させるか、利用者の要求にこたえるだけでなく積極的に情報提供するのもサービスである。その手段のひとつとしてホームページ(以下HP)を作成、運用している。

#### <利用者教育>

年度当初、当研究科では新入生対象の情報処理講習会が開催され「情報資料室ガイダンス」もその1コマとして実施される。昨年度よりガイダンス用のHPを作成している。ガイダンスでは「図書館(室)を利用する」「文献情報の

検索」「雑誌記事・論文の検索」という3つをテーマとした。ガイダンスページを利用し、当情報資料室を含めた名古屋大学附属図書館の利用や他大学・他機関の図書館の利用について紹介した後、受講生各自が実際に端末を利用し、リンクされているオンライン目録および学内で利用可能な各種データベースから文献情報の検索を行った。また同様にインターネット上で提供されている各種文献情報およびデータを紹介、実際にWebブラウザの操作やメールの送受信機能を確認しつつ各自が「情報収集」を体験したのである。「ガイダンスページ」はその後も「情報資料室の利用案内」として随時更新、さらにリンク集を充実させることで「各種情報資源の利用の手引き」として、ひきつづき学生の研究をサポートしている。従来「利用者教育」と言えば年度当初に行う新入生向けのガイダンスのみ、その後はカウンターにおける個別の「レファレンス(参考調査)サービス」となってしまうていた。そのためガイダンスページの更新により継続的な「利用者教育」と「情報の提供・共有」を目指したのである。部局内LANの整備がほぼ完了し、学生用のコンピュータも充足している当研究科においては有効な手段であり、成果をあげていると自負している。

#### <サービス業としての自覚>

私ども図書館員は多少愛想が悪いかもしれないが「サービス業」にたずさわる人間である。ガイダンスにおいて学生に「お金のかからないサービスならできる限りのことはする」という約束をし、その言葉に偽りのないようスタッフは日々奮闘している。百聞は一見に如かず、みなさんの目で確かめていただきたい。なお情報資料室HPおよびガイダンスページのURLは下記の通り。

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/service/library/index.html> (情報資料室HP)

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/service/library/guide.html> (ガイダンスページ)

こちらにもぜひ「ご来室」願いたい。

(あらき ちかえ 大学院国際開発研究科教官)

## 平成10年度中央図書館利用状況

項 目	平成9年度	平成10年度	備 考
奉仕対象者数	19,419人	19,617人	学生 11,070人；院生 5,107人；教官 1,785人；職員 1,655人)
<b>閲覧業務</b>			
1. 年間開館日数	323日	325日	(うち土・日・祝日開館 99日)
2. 年間入館者数	652,586人	666,086人	
3. 館外貸出冊数	108,890冊	110,854冊	1日平均490冊
<b>参考調査業務</b>			
1. 調査依頼者数	3,425人	2,828人	学内者 1,954人，学外者 874人。延 4,259件
2. 他機関への調査依頼	115件	122件	
3. 情報検索利用件数	117件	119件	JOIS 82件；STN 4件；日経テレコン 13件；NACSIS-IR 20件
4. CD-ROM利用件数(ネットワーク)	57,629件	62,103件	MEDLINE 51,603件；BA 6,524件；ERIC 556件；PsycLit 2,865件； NTIS 377件；EBMR 178件
<b>相互利用業務</b>			
1. 図書貸出	784冊	1,081冊	
2. 図書借受	305冊	309冊	
3. 文献複写受付件数	9,356件	11,815件	
4. 文献複写依頼件数	1,614件	892件	
5. 他機関の利用申請	802人	837人	(国立大学共通閲覧証発行：257人、紹介状発行：580人)
<b>館内資料の文献複写利用</b>			
1. 文献複写枚数	814,675枚	919,730枚	
2. コピーデリバリー・サービス	1,748件	1,282件	
3. コンテンツシート・サービス	32,236枚	15,024枚	
<b>館内施設利用</b>			
1. 研究個室	1,235件	1,336件	延利用人数 3,031人
2. 演習室	14件	18件	延利用人数 369人
3. グループ研究室	342件	311件	延利用人数 1,476人
4. 共同研究室	258件	348件	延利用人数 870人
5. タイプ室	19人	20人	
6. 視聴覚	366人	409人	

平成10年度 附属図書館蔵書冊数及び年間図書・雑誌受入数

区 分	蔵書冊数(平成11年3月31日現在)			平成10年度図書受入数			平成10年度雑誌受入種類数		
	和書	洋書	合計	和書	洋書	合計	和雑誌	洋雑誌	合計
中央図書館	559,831冊	400,318冊	960,149冊	7,814冊	4,688冊	12,502冊	3,461種	1,037種	4,498種
医学部分館	62,091	101,689	163,780	769	2,612	3,381	619	909	1,528
文学部	128,796	87,459	216,255	2,788	2,544	5,332	945	408	1,353
教育学部(含附属学校)	67,137	38,288	105,425	1,242	538	1,780	491	335	826
法学部	106,861	76,250	183,111	1,950	1,736	3,686	553	63	616
経済学部(含附属国際経済動態研究センター)	120,795	113,150	233,945	3,089	2,205	5,294	822	464	1,286
情報文化学部(含人間情報学研究科 言語文化部)	94,559	83,610	178,169	3,731	2,419	6,150	570	367	937
理学部	18,173	70,100	88,273	477	1,764	2,241	300	674	974
工学部	76,559	116,495	193,054	1,163	1,699	2,862	816	580	1,396
農学部	61,346	59,917	121,263	917	1,463	2,380	688	518	1,206
大学院国際開発研究科	8,518	11,063	19,581	1,328	1,067	2,395	120	206	326
多元数理科学研究科	9,016	76,281	85,297	250	1,244	1,494	83	496	579
環境医学研究所	1,892	6,544	8,436	12	122	134	209	70	279
太陽地球環境研究所	3,485	8,215	11,700	6	72	78	28	61	89
大気水圏科学研究所	3,203	10,597	13,800	92	259	351	179	172	351
アイソトープ総合センター	176	260	436	5	10	15	5	4	9
化学測定機器センター	20	348	368	0	0	0	0	4	4
情報メディア教育センター	407	452	859	1	18	19	19	12	31
高温エネルギー変換研究センター	49	19	68	6	2	8	3	0	3
遺伝子実験施設	19	29	48	18	23	41	0	0	0
年代測定資料研究センター	85	14	99	40	14	54	1	3	4
先端技術共同研究センター	7	2	9	1	1	2	0	0	0
生物分子応答研究センター	26	76	102	0	1	1	0	0	0
留学生センター	2,313	895	3,208	151	146	297	0	1	1
理工学総合研究センター	70	178	248	12	14	26	0	3	3
大型計算機センター	1,728	2,866	4,594	24	35	59	32	35	67
総合保健体育科学センター	7,495	4,320	11,815	329	666	995	44	58	102
医療技術短期大学部	26,216	4,302	30,518	453	90	543	283	52	335
合計	1,360,873	1,273,737	2,634,610	26,668	25,452	52,120	10,271	6,532	16,803

【国内図書館関係日誌】

- 11.4.19 平成11年度東海地区国立大学図書館協議会総会（於：静岡大学）出席者：戒能館長、田村事務部長、木村情報管理課長、三池情報サービス課長、本多情報管理課課長補佐
- 11.5.24 東海地区大学図書館協議会、機関誌編集委員会、運営委員会（於：名古屋大学）出席者：田村事務部長、木村情報管理課長、本多情報管理課課長補佐
- 11.5.25 平成11年度国立大学図書館事務部課長会議（於：東京医科歯科大学）出席者：田村事務部長、木村情報管理課長、三池情報サービス課長
- 11.5.26-27 国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会（平成10年度第3回）著作権特別委員会（平成10年度第2回）常務理事会（平成10年度第2回）理事会（平成10年度第4回）（於：東京大学）出席者：田村事務部長、木村情報管理課長、三池情報サービス課長
- 11.5.28 国立大学図書館協議会と学術情報センターとの業務連絡会（於：学術情報センター）出席者：田村事務部長、木村情報管理課長、三池情報サービス課長
- 11.6.23-24 第46回国立大学図書館協議会総会（於：東北大学）出席者：戒能館長、田村事務部長、木村情報管理課長、小花情報システム課長

【学内動向】 < 11.4.6 - 11.7.5 >

会議

- ・第11-1回商議員会<4.27>
  - ・今年度の方針について
  - ・商議員会内各種委員会の委員長、副委員長及び委員の選出について
  - ・名古屋大学附属図書館複写規定の一部改正について
- ・第11-1回学術情報事務連絡会<4.28>
- ・第11-1回電子図書館推進委員会<5.27>
- ・第11-1回図書館システム検討委員会<6.9>
- ・第11-1回蔵書整備委員会<6.30>
- 研修・講習会等への参加
- ・東海地区大学図書館協議会講演会（於：名古屋大学）<5.11>出席者：79名
- ・平成11年度図書系職員初任者研修（於：名古屋大学）<5.19-5.21>出席者：10名
- ・経済資料協議会総会（於：龍谷大学）<6.17-18>出席者：河合成典（経）
- ・平成11年度ILLシステム地域講習会（於：名古屋大学）<6.28-6.29>出席者：小林恵子（中）、藪本佳壽子（育）、朝倉佳子（経）、大嶋寛子（医）、山田典栄（理）、川瀬加代子（工）
- ・平成11年度目録システム地域講習会（図書コース）（於：名古屋大学）<6.30-7.2>出席者：山下眞弓（中）、愛場美和子（中）、岩坂令子（経）

戸床トシ子（理）

- ・平成11年度目録システム地域講習会（雑誌コース）（於：名古屋大学）<7.5-7.7>出席者：米津友子（中）、松岡秀樹（中）、菊池有里子（経）、福井登基（理）、吉田静子（理）、伊藤由美（理）
- 人物往来
- <ご多幸を祈ります> - 退職された人 -  
稲垣光代（多元数理科学研究科図書室）6.30
- <はじめまして> - 新しく採用された人 -  
山下眞弓（情報管理課図書受入掛）4.1
- <これからもよろしく> - 配置換になった人 -  
川瀬加代子（工学部・工学研究科総務課図書掛）4.1（国際開発研究科事務掛より）
- 部局動向
- ・教育学部 -- 第2書庫の手動式集密書架を機械式スタックランナーに入替（4月）
- ・教育学部 -- 故結城陸郎教育史教授収集郷土史文書を愛知県県史編纂室の協力で整理完了（35冊、59家・寺、1,050点）HPで公開（6月）
- ・医学部 -- 学内ILLを現物貸出からコピーデリバリシステムに変更し運用開始（6月）
- ・理学部 -- 図書室HP開設、学科図書室から図書掛宛の学外ILL依頼を電子メールでの運用に変更した（5月）
- ・工学部 -- Inside Webを利用者向けに導入（4月）